Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

東京文化財ウィーク（令和３年10月30日～11月７日）特別展示特集

多摩ニュータウンNo.513遺跡の **文字瓦から分かること** ……1

遺跡だより　新宿区 納戸町遺跡 ……3

かゆい所に手が届く 遺物の基本的な見方　動物遺存体（貝類）編② ……4

あの遺跡は今⁉ Vol.19　西東京市 南入経塚遺跡 ……5

1/964 #49　多摩ニュータウン No. 939 遺跡 ……6

「現場のミカタ」令和３年度 企画展示解説（2）「大量」と時間差 ……7

東京都埋蔵文化財センター報　126

多摩ニュータウン No.513 遺跡の 文字瓦から分かること

今年の東京文化財ウィーク（令和３年10月30日～11月７日）特別展示は、東京都指定有形文化財：多摩ニュータウンNo.513遺跡の古代・中世出土品の中から、「文字瓦」を取り上げます。

文字瓦とは

古代の瓦は、現代のように広く一般に葺かれたものではなく、寺院や官衙（役所）などの特別な建物にのみ使用されました。この中に文字が記されたものも散見されますが、これらを総称して「文字瓦」と呼んでいます。文字の内容は様々で、地名・人名を意味するもの、造瓦や寄進の日付が記されたもの、仏教に関連する文字が記されたもの、中には落書き、習書と考えられるものもあります。文字の記し方にも多くの方法があり、スタンプによる押印文字、叩き具による押型文字、成形時の台に掘った文字が転写された模骨文字、工具や指で記すヘラ書き・指書き、さらには筆を用いた墨書などのバリエーションがあります。

文字瓦は、瓦が葺かれていた寺院跡や官衙跡の他、瓦を生産した窯やその関連遺跡からも出土します。そのため、この文字瓦は、瓦当文様、制作技法や窯構造などと同様、当時の窯業生産や流通、さらには当時の政治や社会を読み解く手がかりとなるのです。

多摩ニュータウンNo.513遺跡の文字瓦

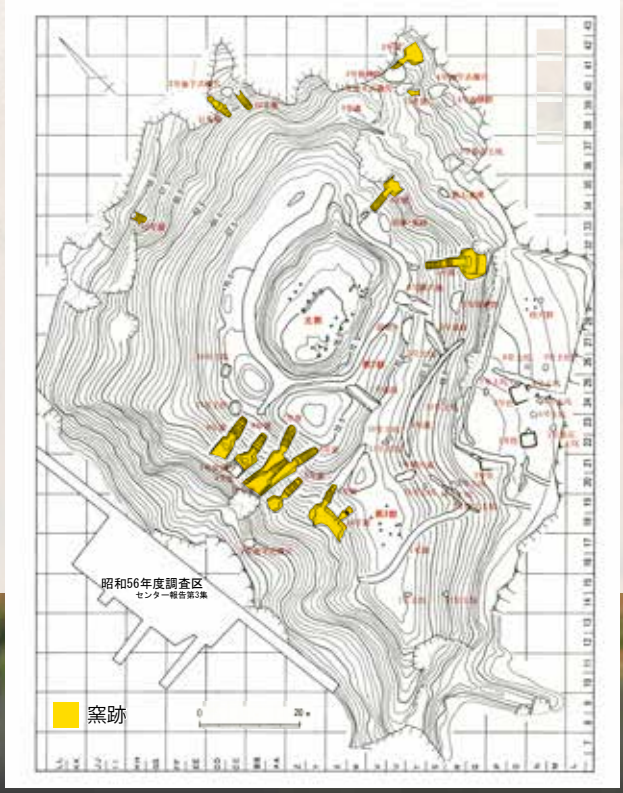
多摩ニュータウンNo.513遺跡（以下、No.513遺跡）は、多摩ニュータウンの東北端にあたる稲城市大丸にあり、大丸窯跡群などとも呼ばれています。多摩川に向かって伸びる尾根の先端付近に突き出した小高い独立丘に立地し、北側には多摩川、その向こうには武蔵国府や国分寺方面などを見渡せました（現在は削平されています）。その頂上付近の斜面からは15基もの窯が見つかっています。このうち、１号・15号窯を除く13基の窯は瓦のみを生産しており、その内容から、武蔵国分寺造営に伴うものと考えられています。国分寺とは、奈良時代の天平13年（741）、聖武天皇が発した詔によって全国各地に造られた寺院です。

No.513遺跡の瓦窯から出土した文字瓦は、ほぼすべてがスタンプ、叩き具、模骨の３種類で占められており、その他は、国分寺造営以前の須恵器窯に改造される前の１号窯跡から「奉」の文字の一部とみられる刻書が１点確認されているのみです。文字瓦に記された文字は、当時の武蔵国にあった郡の名を表すと考えられ、これに郷名と解釈されている例がわずかに加わります。No.513遺跡は他郡の瓦の生産を引き受けていたと考えられ、文字瓦に郡名を付すのは、瓦の供出先を示すためであると推測されています。

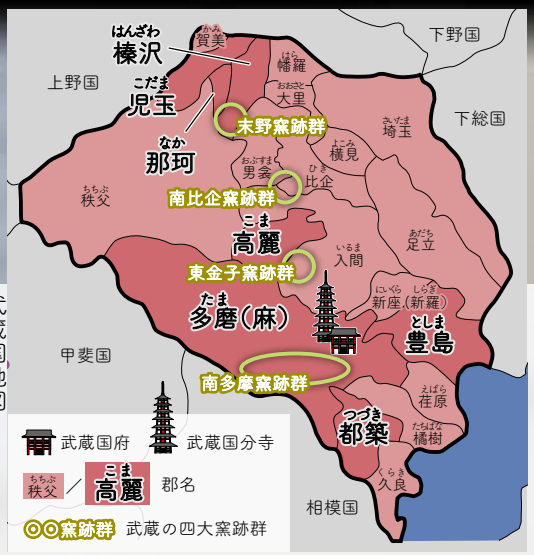
郡名について

当時の武蔵国には、21の郡があったと考えられています。No.513遺跡では、窯の立地する多摩郡（多磨、多麻）を表すと考えられる「多」の文字が多く見つかっており、その

文字の記し方



多摩ニュータウンNo.513遺跡全体図



武蔵国地図

国土地理院　陰影起伏図を加工　https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html

南多摩窯跡群分布図

表現方法にも下図のようなバリエーションが認められます。一方、「都（都築郡）」、「榛（榛沢郡）」、「児（児玉郡）」、「高（高麗郡）」、「那（那珂）郡」など他の郡名と考えられる文字瓦も見つかっており、これらの郡も国分寺創建時の造瓦活動に関与していたことがわかります。

操業時期が他の窯よりも若干遅いと考えられている11号窯からは、郷名の可能性がある文字瓦も見つかっています。「川口」、「田」などがその例ですが、「田」については「多」の同音異形文字の可能性も考えられます。「鳥」は直接示す地名が見当たりませんが、「嶋」の異字であれば豊島郡、「湯」であれば豊島郡湯嶋郷などを表していると推測されます。いずれも丸瓦の凸面に押印されている点が特徴的です。

古代の武蔵国と武蔵国分寺

8世紀初頭の律令制定に伴い、全国に60余の国が編成されました。このうち、武蔵国は、現在の東京都・埼玉県と神奈川県の一部を含む広大な範囲を有していましたが、政治の中心となる国府は、国の南端に近い府中市・大國魂神社の近くに置かれていました。また、国分寺・国分尼寺も国府の北約1.5kmと隣接して建立されています。

武蔵国分寺は、全国に建立された国分寺の中でも最大級の規模をもち、その創建から整備・再建などによって、大量の瓦も必要となりました。国分寺が衰退する10世紀中頃までに、100万枚ほどの量の瓦が使用されたという推測もあるほどです。（国分寺市教育委員会2016『瓦生産からみた武蔵国分寺の造営』）

南多摩窯跡

南多摩窯跡群は、7世紀後半から10世紀中葉まで長期にわたる窯跡が多数見つかっており、その分布域も多摩丘陵内の八王子市・町田市・多摩市・稲城市の四市にまたがる広大なエリアを持っています。最も有名なのは、9～10世紀に操業していた八王子市の御殿山窯跡群で、ここで生産された須恵器の流通域は、武蔵・相模両国に及んでいました。

南多摩窯跡群の最東端にあたる稲城市大丸地区には、No.513遺跡の他に瓦谷戸窯跡群も確認されており、両窯跡群共に国分寺創建期の瓦を中心に生産していました。

武蔵国内には、南多摩窯跡群の他に、東金子・南比企・末野の各窯跡群があり、これらを総称して武蔵の四大窯跡群と呼ぶこともあります。国分寺創健時に瓦を焼いていたのは、主に南多摩・南比企の二つの窯跡群でしたが、最も大規模に生産していたのが、南多摩窯跡群の中でも最も国分寺に近接していた大丸地区の窯場だったと考えられています。このことは、No.513遺跡出土瓦の中に、南比企窯跡群の周辺に位置していた榛沢郡、児玉郡、高麗郡、那珂郡などの郡名が含まれていることから窺われます。

（武笠　多恵子）

多摩ニュータウンNo.513遺跡の文字瓦

背景写真　多摩ニュータウンNo.513遺跡の瓦窯の模型（当センターで展示中）

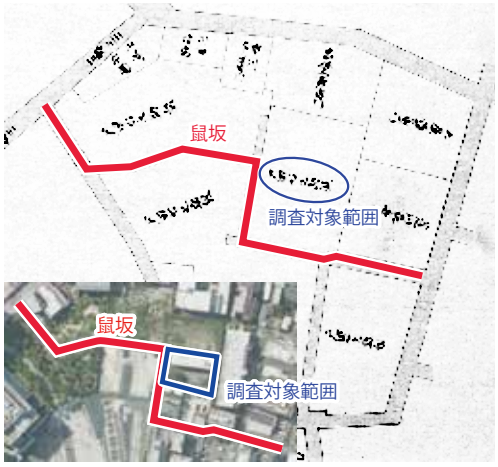
遺跡だより 129

新宿区 納戸町遺跡

所在地　：新宿区払方町 35 － 1
調査期間：2021 年 5 月～2022 月 3 月（発掘）
調査面積：約 1,100㎡

納戸町遺跡は、新宿区納戸町・払方町に位置します。遺跡の南側には、長延寺谷と呼ばれる谷が南東から北西へ入り込んでおり、遺跡はこの谷に面した台地の一角にあります。これまでの調査により、この周辺は縄文時代の中頃（約 4,500 年前）から人々に利用されてきたことが明らかとなっていますが、遺跡の主体は江戸時代です。

寛文 12 年（1672）の絵図によると、この辺りは鷹狩に使う鷹の飼育・訓練を行ったり、鷹狩に従事したりする者たちの屋敷地でした（第 1 図）。絵図と近年の空中写真とを見比べると、遺跡の目の前を通る鼠坂とそれに続く通りは現在とほぼ一致しており、この頃からある古い道であることがわかります。その後、5 代将軍・綱吉が発令した生類憐み政策（17 世紀末葉）により鷹狩が縮小され、鷹関係の役人も大幅に減らされると、ここは旗本・御家人の拝領地となります。



第 1 図　御府内往還其外沿革図書 十一（延宝年中）部分*1 と調査対象周辺の空中写真*2

*1 国立国会図書館ウェブサイトより転載したものに加筆
*2 国土地理院撮影の空中写真に加筆

ところで、17 世紀後葉、この辺りで大事件が起こります。江戸三大仇討ちの一つとされる「浄瑠璃坂の仇討ち」です。寛文 12 年（1672）3 月、宇都宮藩の元藩士・奥平源八が父の仇である同藩の元藩士・奥平隼人を討ちました。襲撃されることを不安に思った隼人は、鷹匠頭である戸田七之助の屋敷へ身を移していましたが、そこに源八の一党が討ち入ります。仇討ちの「現場」となったのが、まさに今回の発掘「現場」だった可能性があるのです。ただし、源八らは終始優勢に事を進めましたが、肝心の隼人を見つけることはできなかったようで、屋敷から引き上げたところ、追ってきた隼人を討ち取ったとされています。

さて、発掘調査は 2021 年 5 月から開始しました。7 月末現在、調査を終えた 300㎡ほどの範囲から約 300 基の遺構が検出されています（第 2 図）。主な遺構は、地下室、井戸跡、土取りのための大きな穴など、江戸時代に一般的なものです。地下室とは、地下に空間を設けて様々な目的に使用した施設です。もしかしたら、隼人は数ある地下室の一つに隠れて反撃の機会をうかがっていたのかもしれません（私の妄想です）。

今後、これらの遺構と出土遺物を詳しく検討することにより、浄瑠璃坂の仇討ちに関する考古学的な証拠が得られる可能性があります。様々な妄想をしながら遺跡を調査するのは、「現場のミカタ」の一つであり、醍醐味です。今後の調査の成果にご期待ください。

（尾田　識好）

第 2 図　鷹匠屋敷及び旗本・御家人拝領地に関わる遺構（2021 年 7 月末現在、オルソ画像）

かゆい所に手が届く
遺物の基本的な見方

動物遺存体（貝類）編②

今回からは、遺跡の調査で貝類の分析がどのように役立つかを紹介します。今回のテーマは、「環境の推定」です。

中里貝塚は、最大長 700m、厚さ 4m 以上にもなる縄文時代中期の巨大な貝塚です。明治 19（1886）年に初めて学界に紹介されてからは、これが人為的な貝塚なのか、自然貝層なのかという議論が長い間続いていました。その謎を解く鍵のひとつとなったのが、北区教育委員会が行った貝類による堆積環境の推定です。

貝層の分析はサンプルを数地点で取って行われました。以下ではそのうちの１地点での結果を紹介します。採取位置はおおよそ第１図のとおりで、出土した貝類を、出土した高さと貝類の生息環境ごとに示したのが第２図です。貝類はフルイで採集され、ハマグリ、マガキ、ヤマトシジミ以外は、どれも２～3mm ほどの大きさで食用にならない微小貝類です。ここでは貝層を、①標高約 2m 以下、②標高 3m 前後、③標高 4m 前後、④標高約 4.5m 以上の４つに分けて説明します。

①では、マガキやシラギクガイのような干潟に生息するもの、コガタヌマコダキ？[※2]やヤマトシジミ（幼貝が多い）のような河口域に生息するもの、カワザンショウガイのような葦原に生息するものが多く出土しています。泥質干潟と連続し、近くに葦原の発達した河口域に見られる貝類の組合せと言えます。

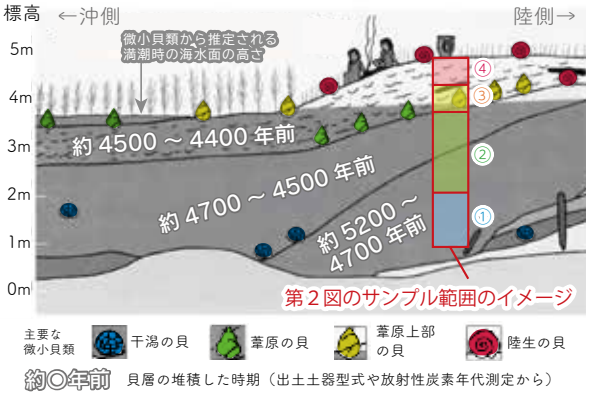
②では河口域の貝類が姿を消し、上部では葦原の中でも潮位の高い位置に生息するクリイロカワザンショウガイが目立ちます。ハマグリとマガキも数が多いですが、これらは干潟の貝なので、自然状態では葦原上部で大量に見つかることはありません。このことから、縄文人が貝殻を捨てたものだと考えられます。この２種が廃棄物であろうことは次の③、④でも同じです。

③では満潮でも水に漬からない、より高い潮位を好むキュウシュウクビキレやヨシダカワザンショウガイ？が現れます。さらに、淡水生のヒラマキモドキや陸生のキビガイ、ハリマキビ、ヒメベッコウも確認でき、陸地に棲む貝の割合が増えています。

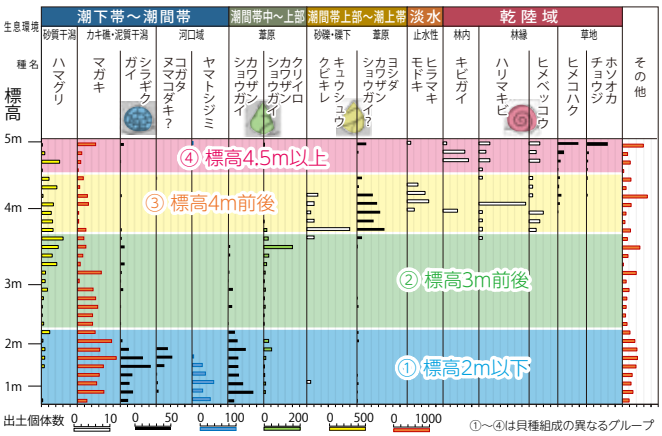
④では草地に生息するヒメコハクやホソオカチョウジが増え、キュウシュウクビキレやヨシダカワザンショウガイ？はあまり見られなくなります。葦原の影響の少ない、より内陸の貝類の組合せです。

①～④の出土貝類の変化は、次のように解釈できます。「元々干潟・河口域だった場所にハマグリやマガキが大量に捨てられ、徐々に地面が上がって陸地に変化した」。詳細は省きますが、より沖側の地点でも同じ標高には同じ微小貝類が見られるため（第１図）、海退の時期とはいえ、貝層の陸化は貝による「埋立」が主な原因だったと推測されます。また、③・④に当たる標高では炭化物が集中し貝層が焼けている部分が多く見つかりました。微小貝類から考えると③・④は陸地であることからも、その場で火を焚いた跡と考えられます。焚火跡は各時期の水際近くにあり、貝を剥き身にするために行ったと推測されています。重たい殻を海辺に捨て、集落に中身だけを持ち帰る。そうした営みを約 800 年間続けた結果、巨大な貝塚になったと考えられるのです。こうして、中里貝塚が人為的な貝塚であることが分かりました。　（宮本　由子）

※1　東京都北区教育委員会 2018『史跡 中里貝塚 総括報告書』第 118 図を加工
※2　「？」の付く種は再同定で結果が変わる可能性があります。
※3　東京都北区教育委員会 2000『中里貝塚』から作成



第１図　サンプル採取位置のイメージ[※1]



第２図　中里貝塚 C2（層厚 4.2m の柱状試料）における貝種組成[※3]

あの遺跡は現在！？ Vol.19

― 西東京市　南入経塚遺跡 ―

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。
このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかご紹介します。
もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

今回は西東京市の「南入経塚」を紹介します（「南入」は旧小字）。西武池袋線保谷駅から西へ1㎞弱、現在の都道234号線「伏見通り」が西武池袋線を立体交差で潜る地下道の上にその塚は“ありました”。道路整備に伴って歩行者・自転車利用者用の地下道が設置されることになり、失われてしまう塚の記録保存のために平成20年に発掘調査が行われました。

この塚は直径約14m、高さ約2.5mの整った正円形で、頂部は直径約3.5mの平坦面をもち、全体的にお椀を伏せたような半円球状の形状をしていました。この塚がいつ、どのような理由で作られたのかは不明で、昔から地元の郷土史家からも文献等から様々な推測が行われ、その形状から古墳を基に後世に作り替えられた可能性も指摘されていました。現存する最も古い記録である元禄2年（1689年）の下保谷の『村絵図』には「禅塚」と記載されており、江戸時代にはすでにこの場所に塚が造られていたことが判ります。

発掘調査の結果、この塚には「古墳」としての埋葬施設や周溝などが無く、古墳とは異なることが判りました。一方で経石や経筒といった「経塚」に伴う遺物も出土しませんでした。塚が中世の古道「鎌倉街道横山道」と「清戸道」の辻に面していることや、かつての上保谷村と下保谷村の境界付近にあることなどから、塚そのものがそれらの「境界」を示すシンボルとしての「境塚」ではないかと推定されています。

現在、塚の近くには案内看板が建てられ、塚の概要と当時の姿を写した写真が掲げられています。　（武内　啓）

◆調査成果が掲載された報告書
2008『南入経塚遺跡　―第3次調査―』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第229集　東京都埋蔵文化財センター

写真1

写真2

写真1　発掘調査前の南入経塚（東京都教育委員会提供）
写真2　現在の南入経塚跡地　写真中央の「下保谷地下歩道」の南側入口の覆屋付近に所在した。

写真3

写真4

写真3　「南入経塚の案内看板」　地下道の東にある立体歩道橋の南側階段の脇に設置されている。
写真4　1989年の南入経塚　雑木が生え、石塔が写っている。この石塔は保谷駅北側の保谷山福泉寺に移設されている。石塔の銘には天明元年（1781年）建立とあり、後の時代に塚に設置されたものである。（東京都教育委員会提供）

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

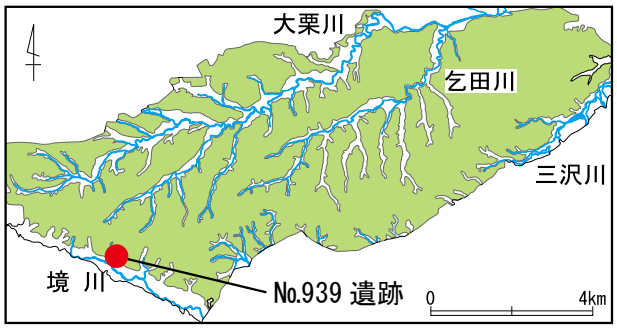
＃49　多摩ニュータウン No.939 遺跡

町田市相原・小山地区は多摩丘陵の南西端にあります。この地区は、東京都と神奈川県の県境となる境川の左岸に沿って入り組んだ尾根が連なっており、前回ご紹介した多摩ニュータウンNo.938遺跡のように、発見された遺跡の年代や規模が丘陵内部の遺跡とやや異なる傾向を示しています。多摩ニュータウン開発事業の終盤に事業が行われた地域であり、鉄道駅建設を中心に広範囲に区画整理・宅地造成が行われたため、注目を集めた調査成果も数多く得られました。

多摩ニュータウンNo.939遺跡も、その中の一つです。総面積55,800㎡に及ぶ広大な遺跡で、昭和63年から5次にわたって断続的に調査が行われました。現在は整然と区画整備され、京王相模原線多摩境駅の南東側の店舗、宅地や緑地などとなっています。

平成10年度から2か年にわたって行われた第5次調査では、境川から相模原台地を望む尾根先端部の落ち際を囲むように40軒の竪穴住居跡が見つかりました。

No.939遺跡空撮



No.939遺跡の位置

その内側の尾根頂部には柱跡が規則的に並んだ「方形柱穴列」や墓壙が複数見つかり、尾根の形に制約され形は歪んではいるものの、いわゆる「環状集落」の様相を呈していることも判りました。縄文時代中期の竪穴住居は、尾根の狭い範囲に構築されたため、互いに重なり合うような状況で見つかり、出土土器などの検討から、3つのグループによって3軒前後で構成されるムラが営まれていた可能性が指摘されています。

方形柱穴列と墓壙群

重なり合う住居跡

また、様々な儀礼の痕跡が確認できたことも特筆されます。令和3年度企画展示「現場のミカタ」でご紹介した複数の打製石斧がまとまって遺棄されていた例（J11号住居跡）の他にも、廃絶した住居の柱を抜いた後に小さな土偶を納めている例、村の3グループに2棟づつ、墓壙群を囲む方形柱穴列の存在など、縄文時代の人々の心意に迫る上での重要な情報が得られました。

私にとっては、多摩ニュータウンでの最後の遺跡調査であり、また、縄文時代の集落跡を調査したのは、調査員人生40年のなかでこの遺跡だけでしたので、ことさら印象深く心に残っています。

（武笠　多恵子）

令和3年度　企画展示解説（2）

現場のミカタ
―発掘調査を読み解く―

「大量」と時間差

「現場」では時折、特定の場所からおびただしい量の遺物が出土することがあります。その最たる例が竪穴住居跡です。住居としての役目を終え、住居「跡」として埋まっていく過程で、昔の人びとはその場所に大量の土器や石器を残していきました。

右の写真は発掘調査中の竪穴住居跡の様子です。縄文時代中期（約 5,000 年前）のこの住居跡には、なんと 50 個体もの縄文土器が残されていました。住居跡中央に大小さまざまな土器がまとまって出土している状況が見て取れます。考古学では、こうした一つの場所にまとまって出土した遺物を「一括（いっかつ）遺物」と呼び、当時の人びとが一つの時期に使った道具の組合せを示す良好な資料と捉（とら）えています。

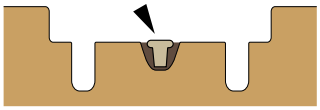
しかしこの「一括遺物」、「現場」の観察と記録によって、いくつかの異なる時間に分けられる場合もあります。右の図を見てみましょう。竪穴住居を構築→使用→廃棄→埋没という各段階に分けて考えてみると、遺物が見つかった場所や状況によっては、遺物どうしに時間差を読み取ることができます。些細（ささい）な時間かもしれませんが、この差が積み重なることで、より一層歴史のリアルに迫ることができるのです。埋まった土や遺物の違（ちが）いを見分け、過去の時間をできる限り解体していくことこそ、「現場」の醍醐味の一つと言えます。

さて、上で述べた時間差ですが、遺物が「作られた」時間差を示すかと言えば、実は違います。竪穴住居の時間が示すのは、あくまで遺物がその場へ持ち込まれた時間、すなわち使用や廃棄の時間を示していて、製作の時間はまた別のモンダイなのです。家のゴミ袋の中身を見ても、モノの製造年月日にはばらつきがあるはず。ではどうやって製作年代を解き明かすのか……いよいよ沼（ぬま）にハマってきました。この続きは近々……

ともあれ、「大量」に出土したモノに向き合い、あえて「時間差」を考えてみる。この営みこそ、「現場」、そして考古学の基本と言えるでしょう。

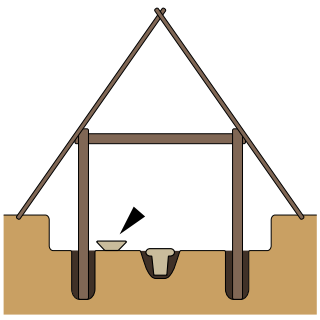
（大網　信良）

竪穴住居跡から出土した大量の土器や石器
（TN No.72 遺跡 328 号住居跡（八王子市））



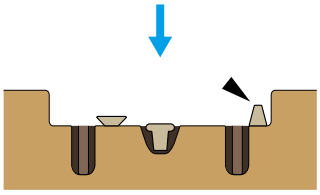
時間１　住居を作る

地面を掘って竪穴住居を作ります。炉（いろり）には土器が埋め込まれます。



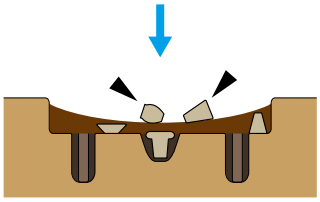
時間２　住居に住む

竪穴住居の中で人が暮らしています。床面には普段の生活で使う土器が置かれていたかもしれません。（「時間３」との区別は難しいですが…）



時間３　住居を捨てる

この竪穴住居を使わなくなります。引っ越しのときに置き去りにされた土器があったかもしれません。



時間４　住居跡が埋まる

竪穴住居跡が埋まっていきます。くぼ地となったこの場所に、たくさんの土器が廃棄されます。

竪穴住居と出土した土器のタイムライン（イメージ）

※今号の表紙：多摩ニュータウン No.513 遺跡出土の文字瓦

たまのよこやま 126　　2021 年 9 月 30 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　https://www.tef.or.jp/maibun/